

# 愛知県ハンガリー友好協会会報

2017年春号

## 《ハンガリーフェスティバル in 愛知》

### “ピアノの調べとトランシルヴァニア地方の伝統文化”

桜花爛漫の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、恒例の「ハンガリーフェスティバル in 愛知」は、《設立20周年記念事業》として6月11日(日) 13:30~16:30、名古屋国際センターホールに於いて“ピアノの調べとトランシルヴァニア地方の伝統文化”と題して行います。



岩倉五条川の桜とのんぼり洗い



プログラムの初めにパラノビチ・ノルバート駐日ハンガリー特命全権大使とヴィハル・ユディットハンガリー日本友好協会会長のご挨拶を頂きます。

皆さんもご存じのようにパラノビチ大使は名古屋大学大学院在学中から名古屋に10年ほどお住まいでした。協会としてもとても親しいお付き合いです。

ヴィハル会長には絵画交換で大変お世話になっています。毎年、交換するパラノビチ・ノルバート大使ハンガリーの小学校をご推薦いただいています。ちょうど俳句の会で来日されるとのことで、フェスティバルにお出でいただけることになりました。

次にピアニスト赤松林太郎さんにベートーヴェンとシューベルトのハンガリー風の曲、また、ハンガリーの作曲家バルトーク、ヴェチェイ、リストのピアノ曲を演奏していただきます。

続いて、谷崎聖子さんに“トランシルヴァニア地方の伝統衣装とヴィハル・ユディット会長刺繍”と題して講演をしていただきます。谷崎さんには昨年7月の刺繍サークルで「イーラーショシュ」についての講演とワークショップをお願いいたしました。

会場には、ハンガリー刺繍サークルの作品(イーラーショシュなど)とハンガリーの子供たちの絵画39点を展示いたします。また、ハンガリーのサラミ、ワイン、お菓子で交流のひと時をお楽しみください。

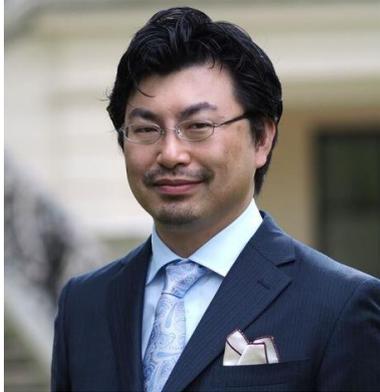
どうぞ皆様お誘い合わせでのご参加をお待ちいたします。



13 : 30～13 : 40

挨拶 : パラノビチ・ノルバート (駐日ハンガリー特命全権大使)  
ヴィハル・ユディット (ハンガリー日本友好協会会長)

13 : 40～14 : 20 ピアノ演奏 : ハンガリー風とリアルハンガリアン



ベートーヴェン: ロンド・ア・カプリッチョ (ハンガリー風奇想曲)  
「失われた小銭への怒り」 Op.129  
シューベルト: ハンガリー風のメロディ D.817  
バルトーク: ミクロコスモス第 140 番「自由な変奏曲」、  
第 153 番「ブルガリアン・リズムによる 6 つの舞曲」  
バルトーク: 3 つのチーク県の民謡  
ヴェチェイ (シフラ編曲): 悲しいワルツ  
リスト: ハンガリー狂詩曲第 6 番 変ニ長調

演奏: 赤松林太郎 (ピアニスト・洗足学園音楽大学客員教授)

14 : 20～15 : 10 講演 : トランシルヴァニア地方の伝統衣装と刺繍



ハンガリーの隣国ルーマニア、トランシルヴァニア地方に  
現在も数多く暮らすハンガリー少数民族。  
カロタセグ、セーク、トロツコー、セーケイ、ヴァルツァシャーク、  
ジメシュなど、地域によって異なる色彩豊かな伝統衣装や刺繍  
についてお話しします。

1. はじめに: マロシュ・ヴァーシャルヘイの文化会館  
(ハンガリーのアールヌーヴォー建築の結晶)
2. カロタセグ地方: 刺繍の宝庫カロタセグ地方
3. セーク村: 赤と黒とバラ刺繍、セーク村
4. トロツコー村: セーケイ岩に抱かれた鉾山の村トロツコー
5. セーケイ地方: 誇り高いセーケイの縞模様
6. ヴァルツァシャーク: ハンガリー、ルーマニア、ザクセンの 3 つの文化が融合した  
チャーンゴの衣装
7. ジメシュ: 山間部で暮らすチャーンゴの衣装

講師: 谷崎聖子 (伝統手芸研究家・ハンガリー文化コーディネーター)

15 : 30～16 : 30 みんなで交流しましょう!

ハンガリーサラミ+パン  
ハンガリーのお菓子  
ハンガリーワインなど



刺繍サークル「イーラーショシュ」の作品



展示: ハンガリー刺繍サークルの作品展

ハンガリーの子供たちの絵画展

(レメーニク・シャーンドル小学校 ヴァーツィ・ミハイ小学校)

## 《 ハンガリーの小学生と犬山の小中学生の絵画交換 》

早稲田みか（大阪大学教授）

4月のはじめ、ソンバトヘイのハンガリー・日本友好協会会長であるシュミット・チッラさんがご主人とふたりで日本を訪れました。ソンバトヘイの子どもたちの描いた絵と日本の子どもたちへの表彰状とプレゼントなどをもってきてくれました。

チッラさんは日本の着物、とくに子どもの着物について、研究をしています。今回は山形まで足をはこび、着物のコレクションをみたり、浜松の着物の着付けの先生をたずねたりしました。ハンガリーで着物の展覧会をすることを計画しています。

また子どもたちと貝殻を着物の端切れで包んで小物をつくりたいので、貝殻を集めているとのこと。アサリやハマグリを召しあがることがありましたら、殻は捨てずに、当協会にいただければ幸いです。



チッラさんとご主人(大阪大学早稲田研究室にて)



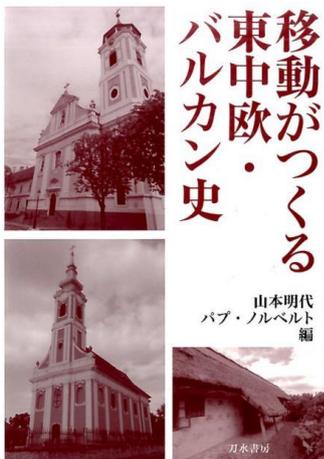
ソンバトヘイの子供たちの  
絵画とプレゼント



### ● 新刊紹介

山本明代・バプ・ノルベルト編

## 『移動がつくる東中欧・バルカン史』(刀水書房、2017年2月刊行)



山本明代(名古屋市立大学大学院人間文化研究科・教授)

ハンガリー南部にあるペーチ大学とハンガリー科学アカデミー歴史学研究所の研究者と日本の研究者とで行ってきた共同研究の成果を本にまとめました。

本のあとがきには、ハンガリー人研究者から寄せられた来日の思い出や日本の印象についてのメッセージも掲載しています。ぜひご覧いただけたらと思います。

# 《アメニおやじのハンガリー紀行―天空の城ラピュタを訪ねて》 I

寺崎 博光

## 【スピシュ城】

スタジオジブリの作品「天空の城ラピュタ」のモデルは3つあるといわれています。その一つはフランスの「モンサンミッシェル」、二つめがペルーの「マチュピチュ」、そして三つめが日本の「竹田城」です。

あまり知られていませんが、実はもう一つあるのです。そしてそれがジブリの作品のイメージに一番近い、スロバキア共和国の「スピシュ城」なのです。



スピシュ城と筆者



ラピュタのイメージにそっくりの内部



この中央ヨーロッパ最大級の石造りの廃墟の城は、タタール人（モンゴル人）の襲来に備えて1209年に建造が始まり、ロマネスク、ルネッサンス、バロックと、様式を変えて増改築を重ね次第に巨大な城になって行きましたが、1780年の大火で廃墟と化してしまいました。1993年にユネスコの世界遺産に登録され修復作業が行われていますが、外観はまだまだ荒れ果てたままの状態です。

モンゴル軍の襲来は建造開始から32年後の1241年、オスマン帝国軍のハンガリー占領が1541年（当時のハンガリー王国はスロバキアへ逃れ、首都をブダペストからブラチスラバへ移しています）ですから、スピシュ城はハンガリー王国の要塞として建造され、廃墟となるまでの571年間、戦略的要衝として栄えたこととなります。

## 【チェコ・スロバキア】

私たち団塊の世代には、スロバキアはチェコ・スロバキアという東欧の社会主義国の名前で知られていますが、それ以外のことはよくわかりません。

まるで空を飛んでいるように チェコは「最初に来た」といった意味らしく、住み着いたスラブ人たちの自称のようです。しかしここにはスラブ人よりも先にケルト系のポイイ人が住んでいて、それにちなんでラテン語でボヘミアと呼ばれています。

チェコとスロバキアはもともと同じスラブ人の民族で言語もよく似ていますが、ボヘミア王国のチェコは1627年にオーストリアの属領となり、ニトラ公国のスロバキアは907年にハンガリーに服属することとなります。

第1次世界大戦終了後、オーストリア・ハンガリー帝国は解体され、チェコ独立の指導者だったマサリクが少しでも大きな国であるほうが外国の干渉を受けないだろうと、一つの国にするよう誘って1918年、チェコ・スロバキアが誕生しました。

しかし、もともと歴史が違うしチェコ人とスロバキア人は仲も良くなく、EUもできたので一緒にいる意味もなくなり、1993年にチェコとスロバキアは平和的に分かれましました。当時は「ビロード離婚」などといわれたようです。

## 【ハンガリー】

ハンガリー人の祖先は日本人と同じアジア系の、マジャール人です。紀元前 5 世紀ごろ、ウラル山脈のあたりから西への移動を始め、何百年もかけて征服と定住を繰り返し、カルパチア山脈を超えて現在のハンガリーの地に征服定住したのは 895 年といわれています。

ハンガリー人は自分たちのことをマジャール人と呼んでいます。ハンガリーとは「(フンガリー) フン族の地」という意味で、マジャール人が来るずっと以前にフン族のアッチラ大王がハンガリー平野に総司令部を設け、末期のローマ帝国を攻めるための根拠地にしたことに始まります。

フン族は 372 年に南ロシアに出現します。そのためフンに対する恐怖心から、あらゆる部族と民族が住んでいる土地から追い散らされました。中学生の時、「フン族の侵入で、ゲルマン民族の大移動」と社会科で教わった記憶があります。

ハンガリー人は私たち日本人と同じように名字、名前の順に書きますし、住所も県、市・町・村、町名、地番の順に表記します。蒙古斑の出る赤ちゃんも珍しくないそうです。



スピシュ城の麓スピシュケー・ポドワジェの町

## 〈 夢が叶う 〉

何かの本でスロバキア共和国に「スピシュ城」という石造りの廃墟の城があり、その廃墟の城がラピユタのイメージに一番近いということを知り、死ぬまでに一度行ってみたいとずっと思っていました。そしてその夢が思いがけない形で叶うことになったのです。

ハンガリーから日本へ戻って来て今は東京に住んでいる娘家族が、三年ぶりにハンガリーへ里帰りすることになり、私もついて行くことにしました。



孫のミハーイと祖父のイムレさんと筆者

かかるので、行くのはとても困難なようです。そこで、国鉄バスの運転手をやっていた娘の義父が、休みをとって車で連れて行ってくださることになりました。(つづく)

今回、出発前に娘が、「行きたいところがあったら言ってください」というので、軽い気持ちで「スピシュ城に行きたい」と言ったところ本気で検討してくれ、とんとん拍子で話が進みました。

娘の夫の実家は、首都ブダペストから南へ 50 キロメートルの、ピリッシュという美しい小さな村にあります。スピシュ城はこの村から片道 400 キロ以上あり、詳しい地図もありません。鉄道は何度も乗り換え、国境越えは言葉が違ってくるので、日本語のわかるガイドを雇う必要があります。したがって多額の費用が

## 〈 事務局より 〉

今年のフェスティバルは設立 20 周年に相応しい素晴らしい企画になりました。出演者の皆さま、ご協力くださった方々に感謝いたします。チラシを同封いたしましたのでお友達にご紹介ください。よろしく願いいたします。